

広沢真臣の子，健三のアメリカ留学について

重 松 優

Hirosawa Saneomi's Son, Kenzo, and His Study Abroad Experience
in Early Meiji Era

Yu Shigematsu

Abstract

This brief essay is a case study of a young Japanese man's intercultural experience between 1870-73. Kenzo Hirosawa, an adopted son of the prominent Chōshū politician Saneomi Hirosawa, had a rare opportunity of living with the US consul in Tokyo for almost a year before leaving for New York to study. Articles written about Kenzo and his uncatalogued papers illustrate the vivid and often turbulent aspects of international education in early Meiji period.

1. はじめに

日本人の海外留学は、幕末から時代が下るにつれ、目的や意義は徐々に変化していった。ひとつの分水嶺は、国内で相応の語学教育と専門教育を授けたのち、優秀者を選抜して海外に送る体制が整った明治10年前後ではなかったか。この頃からの留学経験者には、たとえば外交では小村寿太郎、法学では穂積陳重など、近代国家の事業と制度づくりに大きな貢献を為し得た人物が少なくない。かれらは留学中、それぞれの専門分野で欧米人に伍し得る学識を得た最初の日本人であった。明治時代の前半、御雇い外国人が担った近代化の旗振りという役割は、この世代の留學生が帰国し、引き継いでゆくのである。

一方、それ以前の日本人の留学は、どのようなものだったのだろうか。過去の人物の生涯と関係資料は、功成り名を遂げた者であれば、貴重視されて後世に残る可能性が生まれる。しかし、挫折し無名のまま終わった場合、わざわざ顧みられることは少ない。明治最初期の留学は、万全の準備は期し難く、失敗が多い時期であった。比較的知られる例は、福沢諭吉の門下生だった小幡甚三郎の留学であろう。既に著述もあり、少壮の洋学者として自他ともに認める存在であったが、渡米後、語学力の不足に懊悩した小幡は、一種の適応障害を発症し、衰弱して客死したのである。¹

本稿は、小幡と同時期にアメリカに留学し、共にブルックリン工科学校 (Brooklyn Polytechnic Institute, 今日のニューヨーク大学タンドン校) で学んだ広沢健三の事跡を概観する。広沢健三は、長州閥を代表する政治家広沢真臣の子であり、小幡の死の数ヶ月後、同様に不慮の死を迎えて、日本に帰ることはなかった人物である。享年19歳、当然、功業を為すことはなかったが、父親の関係資料が保存されるに伴い、かれの書類も多くが今日に伝えられた。この時代のブルックリン留學生について

は、塩崎智氏の先行研究が全体像と多数の実例を明らかにしたが、² 広沢家の家族関係資料は目録化されておらず、管見のかぎりでは未だ紹介されていないようである。政府高官の長子という恵まれた立場にあった広沢健三の留学は、明治初年の教育と国際交流の様相を豊かに伝えるものであり、現時点での資料調査報告により、研究目的の一助としたい。

2. 広沢健三の周辺

広沢健三直諒^{なおかた}は、真臣の実子ではない。家系資料によれば、広沢家には少なくとも二代にわたって男子が出ず、真臣もその父直忠も入婿であった。健三の実父は、長州藩士眞鍋安信、兄はのちに陸軍中将、男爵となる眞鍋斌である。明治初年までに、真臣には少なくとも三人の子が生まれたが、いずれも女子であった。そこで、将来、次女萬寿^{まゐす}の婿として家を継がせるとの含みで、眞鍋家の次男健三が養子として迎えられたと思われる。なお、直忠の妻、綱子も、眞鍋家から広沢家に養女として入っており、真臣は養母の実家から、継嗣を選んだことになる。³

明治3年の夏、16歳の健三は留学に向けて一步を踏み出した。このとき、養父真臣は37歳、参議兼民部省御用掛として内政一般を統括する立場にあった。“Kenzo Hirosawa Diary-book Yedo”と題された健三の当時の日記からは、「稽古場」と「塾」で英語学習に励む折々に、甲鉄艦の見物(6月1日)や自転車の試乗(同11日)、築地居留地での断髪(同23日)、時計の購入(7月5日)、内田九一の写真館訪問(同26日)など、積極的に新事物を経験する様子がかがえる。8月6日、健三はアメリカの在東京公使、チャールズ O. シェパードに面会した。⁴ この2日後、広沢真臣もシェパードに会い、留学に向けて健三の教導を依頼する。留学も含めた修業期間は8年を予定し、当座はシェパードと同居、費用はすべて広沢が負担する約束だった。⁵ 子息の教育に欧米留学が必要と考える政府要人は多く、広沢は10月には実兄柏村信の子、庸之助のフランス留学の世話もしている。⁶

シェパード公使は、半年ほど前に着任したばかり、年齢も30歳前後の若い外交官だった。ニューヨーク州の西部、バッファロー市近郊の出身である。父は逃亡奴隷の支援に関係した名望家で、州上院議員をつとめていた。公使自身も、南北戦争に従軍、父親の周旋で士官に挙げられたあとも長く軍に身を置き、知己を得たことが戦後の転身につながったらしい。共和党の人脈を通じて、アメリカ特有の獵官制度がもたらした人事である。⁷

明治3年当時、新橋横浜間の鉄道はまだ未開通で、外国人の多くは、軍隊に守られ、欧米式の居住環境も整った横浜に住む者が多かった。一方、東京在勤を命じられたシェパードは、はじめ築地ホテル館に住んだ。しかし、健三と出会って間もなく、ホテルを訪れる多数のアメリカ人の相手に辟易して、アメリカ公使館として以前使われていた麻布善福寺に移った。⁸ およそ1年後の出発まで、広沢健三はシェパード公使のもとで、いわばホームステイをするのである。シェパードにとって、健三は弟のような存在になり、この年の年末には香港出張に同行させている。⁹

シェパードが善福寺に移ったとき、もうひとりの同居人、E. H. ハウスが加わった。ボストン出身の、いわゆる叩き上げの新聞記者である。かれはトリビューン紙の特派員として来日したが、その前から文名は高く、マーク・トウェインとも交友があった。(のちに、ハウスは日本人の養女をトウェイン家に滞在させている。) 親日的ジャーナリストとして知られるようになってからは、政府の当路者、特に大隈重信と近い関係を保ち、重く用いられるようになる。なお、本学の『近代文学研究叢書』所載の論考が、ハウスについての先駆的研究である。¹⁰

3. “A Japanese Statesman at Home”

ハウスによれば、シェパード公使は客人をもてなすことが好きで、知り合いの欧米人を一通りご馳走攻めにしたあとで、日本人も呼びたい、と考えた。そして最初の客として健三の父、広沢真臣が選ばれる。この顛末をまとめた文章が、ハウスがハーパーズ誌に発表した“A Japanese Statesman at Home”（ある日本の政治家の家庭）である。¹¹ これは、9年後、ハウスの短編集 *Japanese Episodes* に入れられるにあたって、記事冒頭を中心に改稿がなされた。書籍版では、シェパードと健三との出会いについて、ハウスは次の通り書いている。なお以下の翻訳は筆者によるものである。

1870年の秋、アメリカ公使館とされてきた東京のある寺院が、長いあいだの放置と荒廃を経て、仮の主になったひとりの領事の手で甦ったこと、そして語り手である私が、その気さくな外交官と偶然同居するようになったこと、こうした経緯をつまびらかにする必要はないように思う。ただ、私たちは忘れられた館の主人として、ある魅力的な日本人の一青年と共に暮らしはじめた、とだけ述べておきたい。青年の父は日本政府の高官で、かれが西洋に出発する前に外国の慣習を知るべきだとの親心から、しばらく前から息子を領事に預けていた。この若者、広沢健三が、まことに生き生きとして陽気な同居人だと私たちが知るまでに、さほど長くはかからなかった。かれの快活さ、知性、人を飽きさせないユーモアは、出会う人すべてに、ほがらかで健全な印象を与えていたのである。¹²

広沢真臣も、シェパードやハウスとの交際を日記に書き残している。それによれば、10月5日、善福寺を広沢が訪問、続いて翌月の閏10月15日夕、文書大佑頼川重寛を通訳として「米岡士セハルト并友人ハーフル」が広沢邸に招かれた。そして閏10月21日、外務卿沢宣嘉と共に、広沢はふたたび善福寺への招待を受けている。このときの通訳は、文書権正の石橋重朝である。¹³

興味深いことに、上述のハウスの文章では、広沢との会食の順序が入れ替わり、回数も2度に減らされている。はじめに沢宣嘉と広沢が善福寺を訪問し、その答礼にシェパードとハウスが広沢に招かれたという流れが、ハウスの記述である。おそらく、大きな印象を与えた公家出身の外務卿沢宣嘉との出会いを効果的に表現するために、脚色がされたと考えられる。

畳敷きの廊下から聞こえる急ぎ足の足音が、私たちに沢の来訪を告げた。沢は奇跡的に、約束の時刻より先に到着したのである。一般に、時間を守るという考えは、日本人のあいだでは空想にしか存在しない。「先延ばしは時間泥棒」という言葉があるけれども、日本の時間泥棒は時間が守られないことである。沢は、かれの階級にふさわしい燦然とした装いで現れた。個人として、また政府でも、沢は極めて高い地位にあり、望むだけの壮麗さで自分を飾ることができた。（中略）身体に虹を巻きつけてもしない限り、あれ以上に色彩ゆたかな衣装はなかつただろう。宮廷服独特の紫の冠、「公家」のみが履くことを許された漆塗りの鞆。冠と鞆に挟まれた沢は、白、緑、ピンクの絹に身をつつみ、オパール色に輝く塊だった。¹⁴

ハウス個人の好き嫌いはあつただろうが、ハウスは沢を外国人の応接に手慣れた、快活で好ましい人物とみている。また、お歯黒のあとが残る沢の歯がチョコレート色だったこと、家来が巨大な傘を捧げ持っていたことなど、観察者が外国人でなければ記録に残さなかつたであろう事実が、多く散見される。外務卿としての在職期間が短く、3年後に没する沢の人物を語る資料は少ない。また、美しく着飾り、ウィットに富む日本人外交官という描写も大変珍しい。

そして、広沢真臣との初対面の様子は、以下の通りだった。

前触れもなく襖が開け放たれた。機敏かつ優雅な足取りで現れた広沢は、私がこれまで出会ったなかで最も荘重で威厳のある人物だった。上背はほぼ6フィートあって、かれを取りまく日本人に比べると、巨人のように見えた。日本の高官は、はじめて会う人間には多くの場合、いささか堅苦しい礼儀正しさを崩さない。それに比べて、広沢の身のこなし、身振り手振りは驚くほど自由だった。シェパード公使と私が感じ入った様子に、健三の顔も少年らしい誇りに輝いた。(中略)のちに、広沢の肖像はヨーロッパの雑誌に掲載されたが、写真を模した銅版印刷からは、広沢の本当の表情は伝わらない。日本の画家が描く肖像画には、活気のある顔の造作、特に目の光の表現が全く欠けている。しかし、その目の光こそが、広沢の最も大きな特徴であった。生き生きとしたユーモア、性格の明るさでも、かれは沢に比肩していたのである。¹⁵

広沢真臣暗殺事件が起きるのは、シェパード公使たちとの最後の会食から、わずか2ヶ月後のことである。木戸孝允と並ぶ存在とも評された広沢は、明治4年1月9日、就寝中に襲撃を受け横死した。犯人捜索の過程で、事件の夜、広沢と同衾していながら生き残った妻のかねに疑いがかけられ、また家令の某もかねと関係を結び、広沢家の財産を着服していたことが明らかになった。大きな醜聞であった。広沢健三の日録は、この時期は空白である。ハウスは、健三が父親の葬儀で気丈に振る舞う様子を伝えている。

4. アメリカへ

40日の服喪ののち、広沢健三はシェパードのもとを再び訪れ、学習を再開すると告げた。5月、岩倉使節団の出発にあわせて帰国するデロング駐日アメリカ公使の代理としてシェパードが横浜に移ることになり、健三も東京府に横浜での居住許可を願い出た。¹⁶7月13日、かねが真臣の遺児金次郎を出産、金次郎は山口の親戚(おそらく真臣の実兄¹⁷である山口県権大参事柏村信)のもとにあずけられる。¹⁸9月には、冗費を減らすため、東京の邸宅を引き払い、東京府から山口県への転籍を願い出て、みとめられた。そして、10月17日、横浜からアメリカに向けて出発する。ある程度アメリカで学んだのちは、フランスに行く予定だったというから、このころ欧米の上流階級の子弟が盛んに行った「グ



図1



図2

図1 ハーバース誌版の“A Japanese Statesman at Home”⁸に掲載された広沢真臣の肖像。よく知られた写真に基づくが、人物の魅力が十分に伝わらないとハウスはいう。(筆者蔵)

図2 広沢健三のブルックリン留学の世話をしたポイロン家の邸宅はマンハッタンに現存する。住所は今日も変わらず36 East 38th St., 日系ホテル、キタノの裏手にあたる。健三の葬列はここから出発した。(筆者撮影)

ランドツアー」, 世界周遊が留学のモデルだったのではないか。シェパードや沢と同じように, 外交官としての将来を思い描いていたのかもしれない。

健三には, リチャード・ポイロンという現役のアメリカ陸軍士官が同伴した。ポイロンは, 東京滞在中に同じく陸軍出身だったシェパード公使と親しくなり, 健三の留学先としてブルックリン工科学校を紹介したように思われる。ポイロン家は, ブルックリンに造船所を持つ資産家だった。南北戦争中は軍艦も建造しており, 新たな売り込み先として日本を考えていただろう。ポイロンと健三は西回りの航路を取り, エジプト, イタリア, フランス, イギリスの訪問を経て, 明治5年3月22日, ニューヨークに着港した。¹⁹ リチャード・ポイロンの勤務地はアリゾナだったので, マンハッタンに住むかれの両親が, 健三の世話をした。ふだんは学校近くの下宿で勉強に励み, 週末にポイロン家を訪問する日々が続く。

健三は留学関係資料を多数残したが, 興味深いもののひとつは, 請求書や名刺などの生活の様子を伝える細々とした書類である。²⁰ たえば, 工科学校の支払は毎回30ドル, 複数の領収書が残っている。また, 明治5年11月19日付, リチャード・ポイロンが「友人のため」ブルックス・ブラザーズで購入した洋服一式が93ドルであった。ブルックス・ブラザーズの服を着用した日本人としては, かなり早い例であろう。

明治5年秋, 健三から手紙を受け取ったシェパードは返事を書き, ハウスと一緒に真臣の墓参をしたことや日本の知人の様子を伝えた。²¹ そのなかでシェパードは, いくつか間違いはあるが健三の英語が上達したと褒め, 日記は英語でつけているか, 芝居にいれこんで学業が疎かになってはいけない, 私のような友人に手紙を宛てるときは, Dear Sir は他人行儀だから My dear Mr. Shepard と書くべきだ, などと細やかな気配りを見せていた。このころまでに, 健三の英語力が相応に進歩していたことがうかがえるけれども, かれは結局, 工科学校の正規課程にあがることはなかった。

5. 終 焉

明治6年5月14日, シェパードから親族のもとに突如, 健三の死の知らせが届けられた。サンフランシスコから届いた新聞に, 広沢健三急死との短信が出ているというのである。26日には, 健三本人からの遺言なども, シェパードから送られてきた。²²

最期を看取ったリチャード・ポイロンの母や, 日本人の学友が送った手紙によると, ブルックリンに来て以来, 健三は病気になることもなかったが, 4月3日午後, 学校で腹痛を訴え, 歩行も困難になり馬車で下宿に戻った。夜, 医師の診察を受け, 「腸痙衝」, 一種の腹膜炎と診断される。投薬に効果は現れず, 6日には別の二人の医者にも往診を頼んだ。このあいだ, ポイロン家の人々も, 工科学校の校長コックランも, 親類同様に健三の身を案じたが, 衰弱が進んだ状態では, 身体を温めるほかに治療法はないとされた。そして, 30分ごとに湯に浸した布をあて, 周囲が昼夜交代で看病にあたった。しかし, 炎症は腹部全体に広がり, 9日朝には回復の望みはないと健三本人に伝えられた。

健三は大息し, 涙を拭いてから, 「嗚呼, 予大志を立て, 遠く天涯に遊び業未だ成らず, 志未だ報ひす中途にして事之に及ぶ, 遺憾の二字の外, 又何そ言んや」といい, 留学生仲間促され以下の通りの遺言を口述した。遺言は江木高遠が筆記し, 佐藤百太郎, 河野通猷が証人となった。

- 一 成業せずして死去致し候こそ幾重にも残念に候
- 一 遺跡之儀は謹次郎〔金次郎〕へ御渡し可被下候
- 一 亡父上様之仇相分り候哉承及候間、上天にて亡父上様へ御談可申上候
- 一 まず〔萬寿〕へよろしく生前面会出来不申候こそ幾重にも残懐御座候、来夏にも学校休業中ゆるゆる手紙相認、各様へ当方様子悉敷申上候心算之処、不計今日之次第に罷来今更残懐存候
- 一 セッフェルト君へ厚く御伝声可被下候
- 一 死去致候得はグリーンウッド中ポリオン氏墓所に御葬可被下候
- 一 病中死後諸入費諸払、悉く私之金にて御取計可被下候
- 一 持参致し候大小刀式本、実父上様へ為形見御送申上候事
- 一 持参致し候黄金時計并鎖壺本柏村御叔父〔伯父〕様へ為形見御送申上候事
- 一 黄金写真挿一ツおます〔萬寿〕へ為形見相送候事
- 一 指環一ツ養家末女へ為形見相送候事
- 一 指環各一ツ宛実家之異母姉上様并養家姉上様へ為形見御送申上候事
- 一 実家母上様へ寝衣壺枚為形見御送申上候事

第四月九日朝十一字 江木高遠 執筆

佐藤百太郎

恩人に感謝し、家と金銭の始末をつけ、複雑な親族関係にも心配りをした周到な遺書である。第4項には、萬寿と十分に会うことができなかつたことが本当に残念だ、とある。萬寿は健三の8歳年下、このとき11歳だった。おそらく、広沢真臣が東京でかねと同居する間、妻子は山口に残っていたのだろう。明治政府の高官に、よくあったことである。数年後、萬寿は健三から留守を任されていた原田節造を婿に迎えるが、明治11年、節造は離縁され、萬寿自身ものちに他家に嫁いだ。結果として、健三の望んだ通り、金次郎が広沢家を嗣ぐ。広沢金次郎は後年、外交官になる。

遺書の口述から間もなく、4月9日11時50分、リチャード・ポイロンの母に手を握られながら、健三は息を引き取った。遺骸は、ブルックリンの中央、グリーンウッド墓地にあるポイロン家の墓域に葬られた。これも遺言の通りであった。ポイロン夫人は健三の母に宛てた手紙で、次のように書いている。



図3

図3 グリーンウッド墓地の中心部、ブルックリンの開発で知られるピエールポント一族の記念碑が立つ丘の中腹に、広沢健三の墓がある。(写真中央、筆者撮影) 左の大きな墓碑がポイロン家の墓。健三の墓石は、表に「日本留学生広沢健三墓」、裏は、「NONE KNEW THEE BUT TO LOVE THEE, NOR NAME THEE BUT TO PRAISE」(汝を知る者は皆汝を愛し、その名は常に賛美と共にあった)と、詩人フィッツ＝グリーン・ハレックからの引用句が刻されている。

私たち皆にとって、健三は大切でした。息子が健三を家に連れてきてから、そして、息子がわが家を離れ私に健三の相手を任せてからも、私は母としての愛情をもって接しました。かれが自分の息子であるかのように、(筆者注・マンハッタンの)この家がかれの家であるように、接しておりました。でも、学校が遠いものですから、こちらには土曜日と日曜日しか来られません。待っていても健三が来ないときは、病気でないか心配になり、私から会いに行きました。

もう助からないと分かったとき、かれは友人の江木氏に、遺言を託しました。私が、お墓は日本がいいのではないかと聞いたところ、健三はいいえと言いました。私たちの家から見送られ、グリーンウッド墓地の私たちと同じ場所がいいというのです。私は、そのようにしますと伝えました。

先生方は健三に大変親しみを覚えておられる様子でした。病気で苦しんでいるあいだ、大変心配りをしてくださいました。健三を知る全てのひとが、かれを愛しているようでした。お葬式は13日日曜日です。健三は、私の大事なふたりの子供たちの側に眠ることになります。優しく、愛すべき人柄だった健三は、私にとってとても大切で、お別れはとてもつらいです。ただ、健三が私たちと共にいた間、かれが快適に日々を送るよう、できるかぎりのことをしていたとお母様にお伝えしたく思います。学業で、健三の進歩にはめざましいものがあり、またかれが書いた絵も素晴らしく、ふたつは額にいれています。準備が済み次第、健三の身の回りの品々をお送りいたします。²³

はたして広沢健三が帰国ののち、かれ自身が望んだような留学の成果が挙げられたかは分からない。シェパード公使との出会いから3年を経たが、語学力はまだ発達の途上にあつたようである。数年後に欧米に出発する政府留学生たちのように、高度な専門知識を習得する準備は出来ていなかった。また世の常として、偉大な親の存在を超えることは難しい。

しかし、広沢健三の留学関係資料がこれほど多く残されたのは、かれが広沢家の一員だったことだけが理由ではない。資料が伝える広沢健三の面影は美しい。国会図書館に広沢健三の資料があるのは、父真臣の存在によるが、周囲の人々に筆を取らせ、資料をつくらしめたのは、誰からも愛された健三自身の人柄と行為ゆえであった。かれの留学は、志半ばに終わったけれども、後世に伝えるに値する資料と物語を生んだのである。

【付 記】

本稿の資料の解説と読解には、平成29年度の3年ゼミ生(英語コミュニケーション学科・重松ゼミ)が参加した。なお、引用文献の表記は適宜現代仮名遣いに、旧字体は新字体に改めた。

注

- 1 西澤直子「小幡甚三郎のアメリカ留学：福澤研究センター所蔵資料紹介」、『近代日本研究』14巻、1997年、150頁。
- 2 塩崎智「幕末維新在ブルックリン(NY州)日本人留学生関連資料集成及び考察(1)-(3)」、『拓殖大学語学研究』114, 116, 117号、2007-2008年および塩崎智「ブルックリンに死す」、『青淵』705号、2007年。
- 3 広沢家の親族関係については、主に霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』下巻、霞会館、1996年に拠る。
- 4 「庚午六月改直諒 Diary book 日載全」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号21。本資料は明治5年7月までの日記である。
- 5 Charles O. Shepard, *Christmas Stories for My Sister's Children: Personal Reminiscences of a Not*

- Uneventful Life*, Entre Nous, 1878 年, 76 頁。
- 6 大塚武松編『広沢真臣日記』日本史籍協会, 1931 年, 349, 374 頁。
 - 7 シェパードについては, 自著である前出 *Christmas Stories for My Sister's Children: Personal Reminiscences of a Not Uneventful Life* に前半生がまとめられ, 広沢健三の思い出も言及されている。
 - 8 E. H. House, "A Japanese Statesman at Home," *Harper's New Monthly Magazine*, Vol. 44, No. 262, 1872 年 3 月号。
 - 9 太政類典・第 1 編・慶應 3 年~明治 4 年・第 120 卷・学制・生徒第 2。
 - 10 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』5 卷, 昭和女子大学光葉会, 1957 年。また James L. Huffman, *A Yankee in Meiji Japan: The Crusading Journalist*, Rowman & Littlefield Publishers, 2003 年が, ハウスの明治初年の動向に詳しい。大隈との関係は拙稿「香港総督ジョン・ポープ・ヘネシーと大隈重信: 大隈財政と条約改正における御雇外国人」, 『社学研論集』8 号, 2006 年を参照。
 - 11 前出 E. H. House, "A Japanese Statesman at Home"。
 - 12 E. H. House, *Japanese Episodes*, James R. Osgood and Company, 1881 年。
 - 13 前出『広沢真臣日記』, 367, 380, 382 頁。
 - 14 前出 *Japanese Episodes*, 161 頁。
 - 15 前出 *Japanese Episodes*, 162 頁。
 - 16 「広沢健三履歴書」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 51-1。
 - 17 「広沢満寿婚儀関係書類」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 49-14。
 - 18 「広沢健三伺願書」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 3-29, 「広沢金次郎宛 柏村信電報」(山口向山広沢金次郎宛, 明治 6 年 5 月 30 日付)同文書封筒番号 30「広沢直諒於米国死去一件控」中。
 - 19 「原田節造宛広沢健三書翰」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 30「広沢直諒於米国死去一件控」中。
 - 20 「広沢健三宛受取証等」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 98。
 - 21 「広沢健三宛 C. O. Shepard 書翰」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 30「広沢直諒於米国死去一件控」中。
 - 22 「原田節造宛 C. O. Shepard 書翰」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 30「広沢直諒於米国死去一件控」中。
 - 23 「広沢健三養母宛 R. Poillon 母書翰」国会図書館憲政資料室・広沢真臣文書(家族関係資料)封筒番号 30「広沢直諒於米国死去一件控」中。

(しげまつ ゆう 英語コミュニケーション学科)